様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月　１０日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：　2006～2009
課題番号：　１８５３０４９１
研究課題名（和文）　社会的情報の処理における感情制御過程の影響

研究課題名（英文）　Effects of affect regulation on social information processing

研究代表者
田中　知恵（TANAKA TOMOE）
昭和女子大学・人間社会学部・講師
研究者番号：５０４０７５７４

研究成果の概要（和文）：　感情制御過程が社会的情報の処理に及ぼす影響について検討するため、5 つの実験と 1 つの調査を実施した。その結果、(1)情報の受け手は処理対象から生じる感情を予期し、情報を処理することがネガティブ感情改善の方略であるとの期待感が高い場合、対象を精緻に処理すること、(2)この過程は自動的に始発すること、(3)ただし社会的制約の存在によってその自動性が制限される場合があることが示された。感情改善の働きを組み込んだ感情と情報処理モデルの可能性について考察した。

研究成果の概要（英文）：　Five experiments and one survey were conducted to examine the effects of the affect regulation processes on social information processing. The results indicated the following. (1) Recipients of information anticipated the affects arising from the objects that they were processing and they elaborated the objects when they expected that processing the information would be an effective way to repair negative affect. (2) These processes started automatically. (3) In certain cases, these processes were qualified by social constraints. A model of affect and information processing that incorporates the role of affect repair is discussed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	900,000	0	900,000
２００８年度	400,000	120,000	520,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	270,000	2,070,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：社会的情報の処理　感情制御過程　感情制御方略　感情改善　感情予期　社会的認知　非意識的過程

１．研究開始当初の背景

近年の社会心理学の領域では、記憶や社会的判断、社会的情報の処理における感情制御動機の働きを仮定し、その影響について実証的に検討してきた。例えば、感情と情報処理について検討した田中（2004）の研究では、

ポジティブもしくはネガティブな感情を生じさせる社会的情報として広告を実験参加者に呈示し、共通の広告メッセージに対する記憶再生を測定した。その結果、メッセージの再生はネガティブ条件の方が低く、感情改善に動機づけられた受け手は、そうした感情を生じさせる源泉から注意を逸らしたため、精緻化程度が低まることが示された。こうした実証研究の知見は、社会的情報に対する処理の仕方が、ネガティブ感情の改善を目的としてなされたことを示唆している。

しかしながらこれまでの研究では感情制御動機について直接に検討されておらず、動機の強さを規定する要因を直接的に操作もしくは測定することで、この変数が行動を生み出すメカニズムとして働くことを明らかにする必要性があった。

２．研究の目的

本研究では以下の 3 点の課題について検討する。

(1)　感情制御の働きを組み込んだ感情と情報処理モデルに関する検討

情報の受け手は処理対象から生じる感情を予期し、情報を処理することがポジティブ感情維持もしくはネガティブ感情改善の方略であるとの期待感が高い場合、対象を精緻に処理すると考えられる。このモデルについて実証的に検討する。

(2)　感情制御の過程に関する検討：自動的過程か統制的過程か

モデルにおいて想定される感情制御過程の自動性について検討する。

(3)　感情制御の動機的過程における限定条件に対する検討

感情制御方略に対する期待感の働きが自動的なものとしても、統制的過程によって制限されることについて検討する。

３．研究の方法

本研究では 5 つの実験と 1 つの調査という実証的方法を用いて、上記 3 点の課題について検討した。

(1)　実験を実施して感情制御方略への期待感を操作し、情報処理に及ぼす影響について検討した（研究 1)。

(2)　実験を実施して対象から生じる感情の予期を非意識的に操作し、情報処理に及ぼす影響について検討した（研究 2A)。また手続きを変更して追試した（研究 2B)。

(3)　調査を実施し、感情改善方略に対する期待感の個人差が、実際に方略の使用を通じて感情改善を予測するのか検討した (研究 3)。

(4)　実験を実施し、情報処理方略に対する感情改善方略の期待感の効果が、研究 3 の個人差によって調整されるか検討した (研究 4)

(5)　実験を実施し、感情改善方略の期待感の自動的な過程が、社会的状況の制約によって制限されるか検討した（研究 5)

４．研究成果

(1)　感情制御過程と情報処理に関して

①研究 1：感情改善方略に対する期待感を実験的に操作し、情報処理に対する影響について検討した。実験参加者に自伝的記憶の想起と音楽聴取によりネガティブ感情を導出したのち、別の課題として感情のコントロールに関するエッセイを呈示した。このエッセイの内容により、感情改善方略に対する期待感を操作した。さらに別の課題として、映像刺激により説得メッセージを呈示した。その際、映像の背景音楽によりポジティブもしくはネガティブな感情状態を予期させた。

説得メッセージの自由再生について検討したところ、感情改善期待感が高い場合には、ネガティブな感情が予期されるメッセージの精緻化程度が低まることが示された。こうした効果は期待感が低い場合には認められず、メッセージの受け手は処理対象から生じる感情を予期して処理方法を決定するものの、感情改善の期待感によってその効果が調整されることが示唆された。

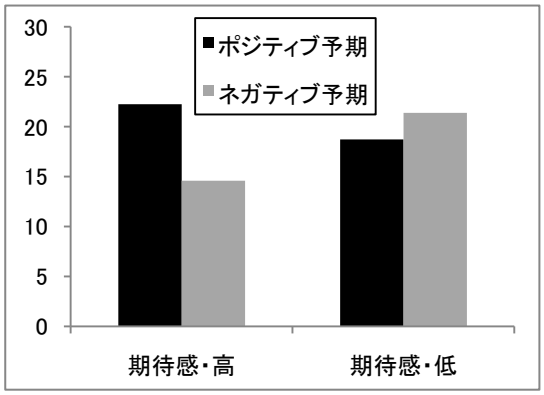

図 1 説得メッセージ自由再生得点（研究 1)

②研究 3：ネガティブな感情状態にある場合、その制御方略に対する期待感が実際に感情

改善をもたらすのか、調査参加者の抑うつの変化を測定することにより検討した。5 週間の間隔をあけて同じ参加者を対象として 2 回の調査を実施した。

その結果、ネガティブ感情制御方略に対する期待感が高い場合にはポジティブな出来事の経験が多ければ、ネガティブな出来事の経験が抑うつの上昇に結びつかないことが示された。この結果は、感情改善期待感の個人差によって感情制御の働きが異なることを示唆しており、尺度で測定される変数を用いて実証的な検討が可能であることが確認された。

③研究 4：研究 3 において妥当性が確認されたネガティブ感情制御方略への期待感を測定する尺度を用いて、実験参加者の期待感を測定し、広告に関する調査データの文章呈示によりメッセージに対する感情の予期を操作した。続けてネガティブ感情を導出する広告映像を呈示し、その後で示される広告メッセージの精緻化の程度を自由再生により検討した。

その結果、ネガティブ感情が予期されるメッセージは、ポジティブ感情が予期されるメッセージよりも精緻化の程度が低いことが示された。この結果は研究 1 と同様であった。また統計的に有意ではないものの、感情改善の期待感が高い場合には低い場合よりも、この効果が大きい平均値パターンが見られた。

以上の実証研究において、情報の受け手は処理対象から生じる感情を予期し、情報を処理することがネガティブ感情改善の方略であるとの期待感が高い場合には、対象を精緻に処理した。この結果は、研究目的 1 において仮定しているネガティブ感情改善プロセスを組み込んだモデルの構築可能性を示している。しかしながら、同時に仮定していたポジティブ感情維持のプロセスは本研究結果においては認められなかった。このことは、2 つの可能性を示唆している。第一に、実験で用いられた刺激が十分にポジティブ感情を予期させるものでなかった可能性、第二にポジティブ感情状態にある場合には、感情制御よりも他の目標が働きやすい可能性である。この点は今後の研究における検討課題である。

(2)　感情制御の自動性に関して

①研究 2A：感情予期を非意識的に操作し、感情改善方略に対する期待感の働きの自動性について検討した。実験参加者に単語の記憶に関する調査として単語対を記憶させた。このときニュートラル語をポジティブ、ネガティブ、ニュートラルいずれかの単語と対にした。次にポジティブもしくはネガティブな感情を導出する映像を呈示した。最後に印刷広告を呈示したが、広告キャッチコピーには最初の課題で呈示されたニュートラル語が含まれていた。

広告商品の評価について検討したところ、機能性に関する得点においてネガティブ感情状態にある場合にはネガティブな感情の予期が生じる対象への評価が低まり、ポジティブな感情の予期が生じる対象への評価が高かった。この効果は研究 1 と同様、ネガティブ感情改善の働きを示唆するものであった。

②研究 2B：先の研究 2A では感情予期の操作が弱かった可能性があったため、手続きを変更して追試した。まず、情報処理の対象を映像広告へと変更した。この手続きにより、感情予期の操作で用いられたニュートラル語を広告メッセージと同時に呈示するのではなく、メッセージの前に呈示することが可能となり、より非意識的な感情予期の働きを明らかにすることができると考えた。それ以外の手続きは研究 2A と同様であった。

広告商品の評価について検討したところ、雰囲気に関する得点において、ネガティブな感情状態にある場合に、ニュートラルな感情の予期が生じる対象への評価がネガティブな感情の予期が生じる対象への評価よりも高かった。この結果は研究 2A と同様に、ネガティブ感情改善の働きを示すものと考察された。

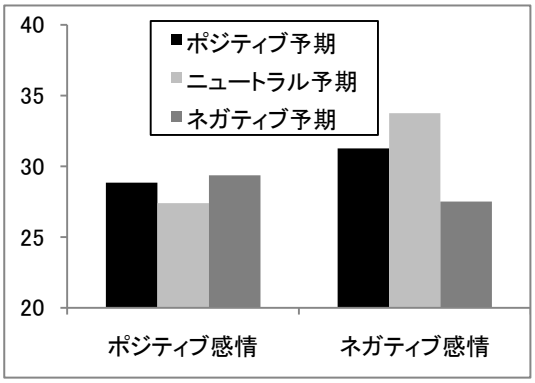

図 2　広告商品評価（雰囲気得点）
（研究 2B）

以上の実証研究によって、ネガティブな感情状態にある場合、処理対象それ自体のヴェイレンスはニュートラルであっても対象が感情改善の非意識的予期を生じさせるものであれば、その情報は精緻に処理されることが示された。この結果は、研究目的 2 で提起したように感情改善過程が非意識的（自動的）に起こりうることを示唆している。

ただし、研究目的1にそくして実施された研究1や研究4同様、研究2の2つの実験においてもポジティブ感情維持過程が生じた証左は認められていない。たとえば研究1や研究2では何らかの統制的過程が働いてポジティブ感情維持方略を取らせなくさせていたとしても、研究2Aならびに研究2Bの手続きはそうした過程が働きづらいものであった。ポジティブ感情時に感情維持が意識的に志向されることもあるが、他の目標がある場合には統制的また自動的にその目標が遂行されるのかもしれない。この考察は、ポジティブ感情時における自己制御志向性に対する研究視点と結びついている。

(3) 感情と情報処理における統制的過程に関して

研究 5：社会的制約がある場合について実験を行い実施した。研究2Aおよび2Bの結果から、ネガティブ感情状態にある場合の感情改善が自動的な過程であることが示唆されたため、ネガティブ感情時に感情改善以外の目標が存在する状況を扱った。映像呈示によりネガティブ感情を導出した後、後で行う課題に対する教示により、他者との相互作用予期の有無を操作した。映像広告の背景音楽によりポジティブもしくはネガティブな感情の予期を操作し、続けて呈示されるニュートラルな広告メッセージに対する興味や精緻化の程度について測定した。

広告に対する評価について検討したところ、好感度に関する得点において、相互作用の予期がない場合には、ネガティブ感情が予期される対象よりもポジティブ感情が予期される対象の方が高く評価されていた。この結果は、研究1や4の結果のパターンと同一である。他方、相互作用の予期がある場合には感情予期による差は認められなかった。この結果から、感情改善の自動的過程が他者との相互作用という社会的制約によって制限を受ける可能性が示唆された。

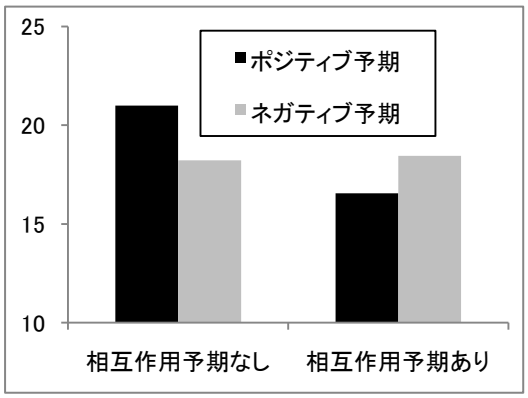

図3　広告評価（好意度得点）（研究5）

しかしながら、広告テーマに対する興味の測度においては、相互作用の予期がない場合に感情予期による差は認められず、相互作用の予期がある場合に、ネガティブ感情が予期される対象への得点が高かった。この予測と異なる結果に関しては、今後、広告刺激やテーマを変更して追試し検討する必要性がある。

研究2Aならびに研究2Bでは、ネガティブ感情時の感情改善方略は自動的に生じる過程であることが示唆されたが、研究5によってその自動性は統制的過程によって制約を受ける可能性が示された。このことは、研究目的3で仮定していたように、ネガティブな感情改善は自動的に始発するが、社会的状況によって制限される場合があることを示している。

(4)　今後の課題と展望

本研究により、情報の受け手は処理対象から生じる感情を予期し、情報を処理することがネガティブ感情改善の方略であるとの期待感が高い場合には、対象を精緻に処理すること、この過程は自動的に始発すること、ただし社会的制約の存在によってその自動性が制限される場合があることが示された。これらの結果は、感情と情報処理のモデルにおいて感情制御過程の働きを組み込む必要を示唆している。

しかしながら、以下の点は本研究で未検討な重要課題である。第一に、判断対象の評価が情報処理過程においてどのような意味を持つのかという点である。研究において予測されていたように、情報の受け手がその対象を処理しないことで感情改善を図ろうとしたのであれば、対象の処理程度が低くなるはずである。研究1の結果や研究3の結果の一部はこのことを支持している。ただし、研究2A・2Bや研究5では対象の精緻化程度に条件間の差は見られず、対象の評価を測定した従属変数において予測していた結果のパターンが認められた。本研究では仮説に従い、この結果を感情改善に動機づけられた受け手が対象の処理を回避したため、本来は他の条件と同様に高く評価されるべきであった対象の評価が低まったためと解釈したが、他の説明も可能かもしれない。たとえば、研究5では映像広告の背景音楽によって感情予期を操作したが、予期と同時に感情状態も操作され、その後に呈示されたニュートラルな広告メッセージに対して感情一致判断が生じていた可能性がある。この点に関しては、今後、対象への注目を視線追跡装置などによって測定し、検討する必要性があるだろう。

第二に、ポジティブ感情時の感情制御の働きに関する検討である。前述したように、本

研究ではネガティブ感情改善の働きは実証的に示されたものの、ポジティブ感情維持の働きについては見いだされなかった。このことが、実験の手続き上の問題によるものか、もしくはポジティブ感情時には感情維持よりも他の目標が働きやすいことを示唆するのかという点については、今後さらに検討する必要がある。

(5)　実証研究の報告とまとめ

上述した実証研究の主な結果は、学術論文もしくは学会大会にて報告された。またこれらの研究を遂行するにあたり、感情と情報処理の相互作用に関してまとめた研究知見の一部は学術図書において報告された。

現在は、論文未掲載の研究結果をまとめ、学会誌へ投稿準備中である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 田中知恵、沼崎誠、ネガティブ・ムード制御方略に対する期待感の効果、心理学研究、79、107-115、2008、査読有
② 田中知恵、関連感情がメッセージの精緻化に及ぼす影響、昭和女子大学生活心理研究所紀要、8、29－34、2006、査読有

〔学会発表〕（計６件）

① Tanaka, T & Harashima, M、Mood as resource in feedback-seeking: The role of self-regulatory functions of positive mood、11th Annual Conference of Society for Personality and Social Psychology、2010 年 1 月 29 日、Las Vegas (Nevada)
② 田中知恵、感情改善期待感がメッセージ処理に及ぼす影響、日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会、2009 年 10 月 11 日、大阪大学
③ 田中知恵、村田光二、藤島喜嗣、非意識的な感情の予期がメッセージ処理に及ぼす影響 (2)、日本心理学会第 73 回大会、2009 年 8 月 26 日、立命館大学
④ 田中知恵、感情制御の志向性と感情予測に関する検討、日本パーソナリティ心理学会第 17 回大会、2008 年 11 月 16 日、お茶の水女子大学
⑤ 田中知恵、感情予測と感情制御　そしてその影響、日本心理学会第 72 回大会、ワークショップ感情予測研究の可能性にて話題提供、2008 年 7 月 21 日、北海道大学
⑥ 田中知恵、村田光二、藤島喜嗣、非意識的な感情の予期がメッセージ処理に及ぼす影響、日本心理学会第 72 回大会、2008 年 7 月 19 日、北海道大学

〔図書〕（計４件）

① 田中知恵、感情と消費行動、産業・組織心理学会（編）、産業・組織心理学ハンドブック、丸善、2009、456－459
② 田中知恵、ムードと社会的情報処理、日本社会心理学会（編）、社会心理学事典、丸善、2009、58－59
③ 田中知恵、広告の心理学、村田光二・坂元章・小口孝司（編）、社会心理学の基礎と応用、放送大学教育振興会、2008、144－159
④ 田中知恵、感情と認知の主要理論、北村英哉・木村晴（編）、感情研究の新展開、ナカニシヤ出版、2006、21－42

６．研究組織

(1)研究代表者

田中　知恵（TANAKA TOMOE）
昭和女子大学・人間社会学部・講師
研究者番号：50407574

(2)研究分担者

村田　光二（MURATA KOJI）
一橋大学・社会学研究科・教授
研究者番号：40190912
（H18→H20:連携研究者）
藤島　喜嗣（FUJISHIMA YOSHITSUGU）
昭和女子大学・人間社会学部・講師
研究者番号：80349125
（H18→H20：連携研究者）

(3)連携研究者